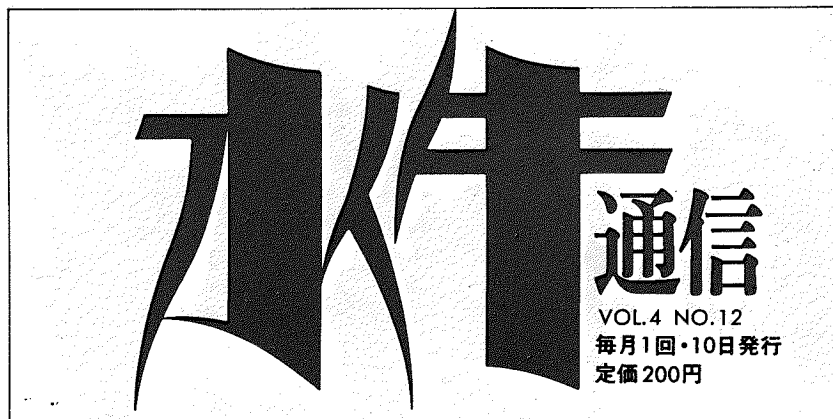


水牛通信 毎月1回10日発行 1982年12月10日発行 通巻42号 1980年5月23日第三種郵便物認可



人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

夕張の四季

写真・文 戸田れい子



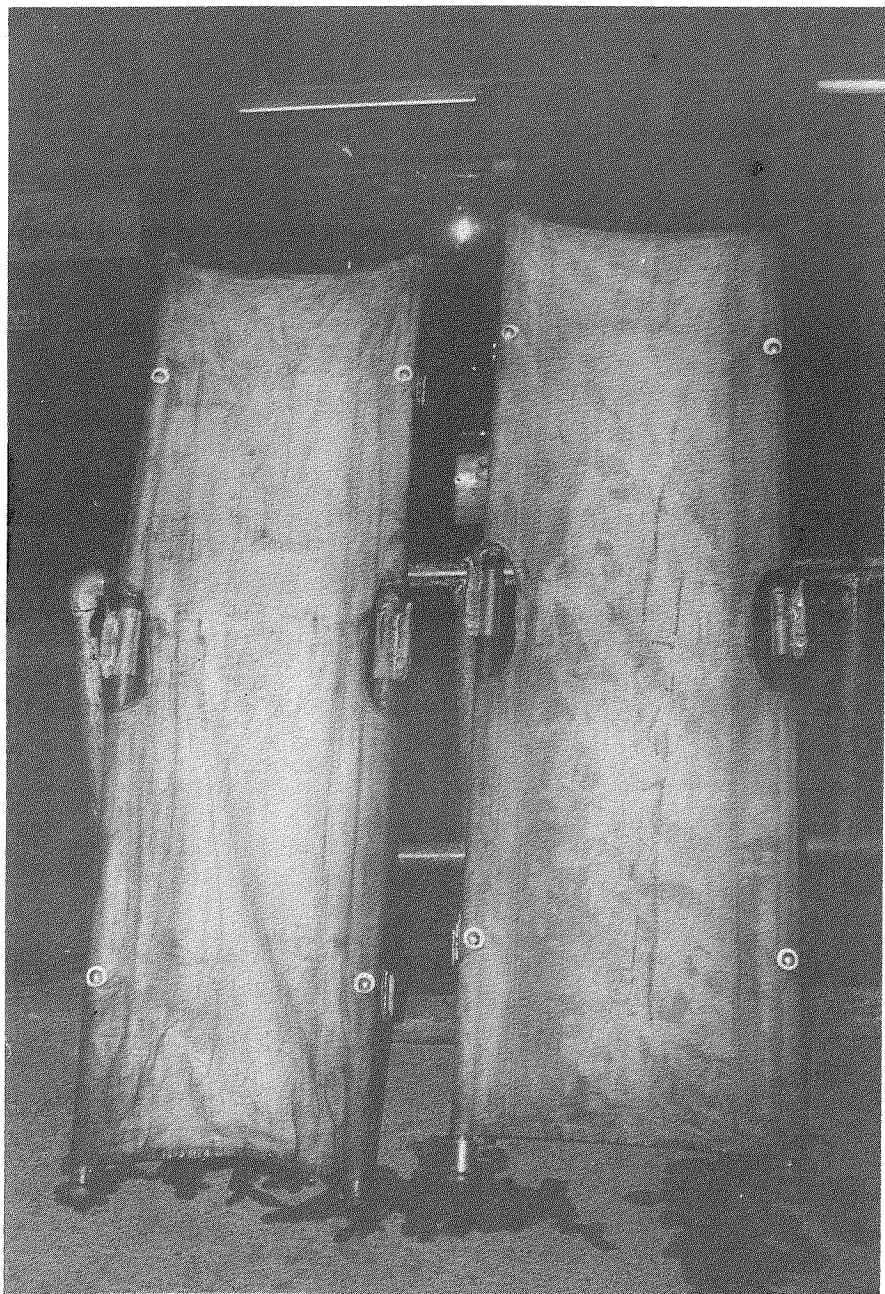


夕張・晩冬

①カラス 夕張はやたらカラスの多い街である。その姿はワシを思わせるほどで、犬小屋を襲っては鍋ごとエサを失敬したり、時には老人や子どもの手からトウモロコシを奪い去ることさえある。昨年十月十六日のガス突出事故で犠牲になった九十三人の初盆の時、その多くが眠る市内の共同墓地の上空はカラスの大群におおいつくされた。供物をねらって周辺の町からも押し寄せたのである。地元の人たちはこのカラスを「出張ガラス」と呼んだ。その鳴き声は当初「タンコウ、タンコウ」と聞えたが、最近では気のせいか、「ヘイザン、ヘイザン」と耳に響いてくるのだった。

②子ども 外は吹雪だった。小便可さい部屋にストーブが赤々と燃え、一歳から五歳までの年子の子どもたちが遊んでいた。組夫の父親は肝臓を痛めて入院中だった。最新型の冷蔵庫には納豆が数個入っているだけだった。腹をすかせた子どもたちが冷凍室のミミズを食べたという話を聞かされた。釣り好きの父親が保存していたミミズだった。ガス突出事故で父親をなくした二十四歳の青年が自殺したのはこの日の朝だった。遺書には「父さんの近くに行きたいが、こんな形で死ぬので私は地獄に行くでしょう」とあった。

③タンカ 最後の遺体が収容された今年三月二十八日の翌日、夕張新鉱の繰込所に五つのタンカが立てかけられてあった。遺体収容に使われたタンカであった。鼻をつく消毒液のにおい、亡者を形どつ





④

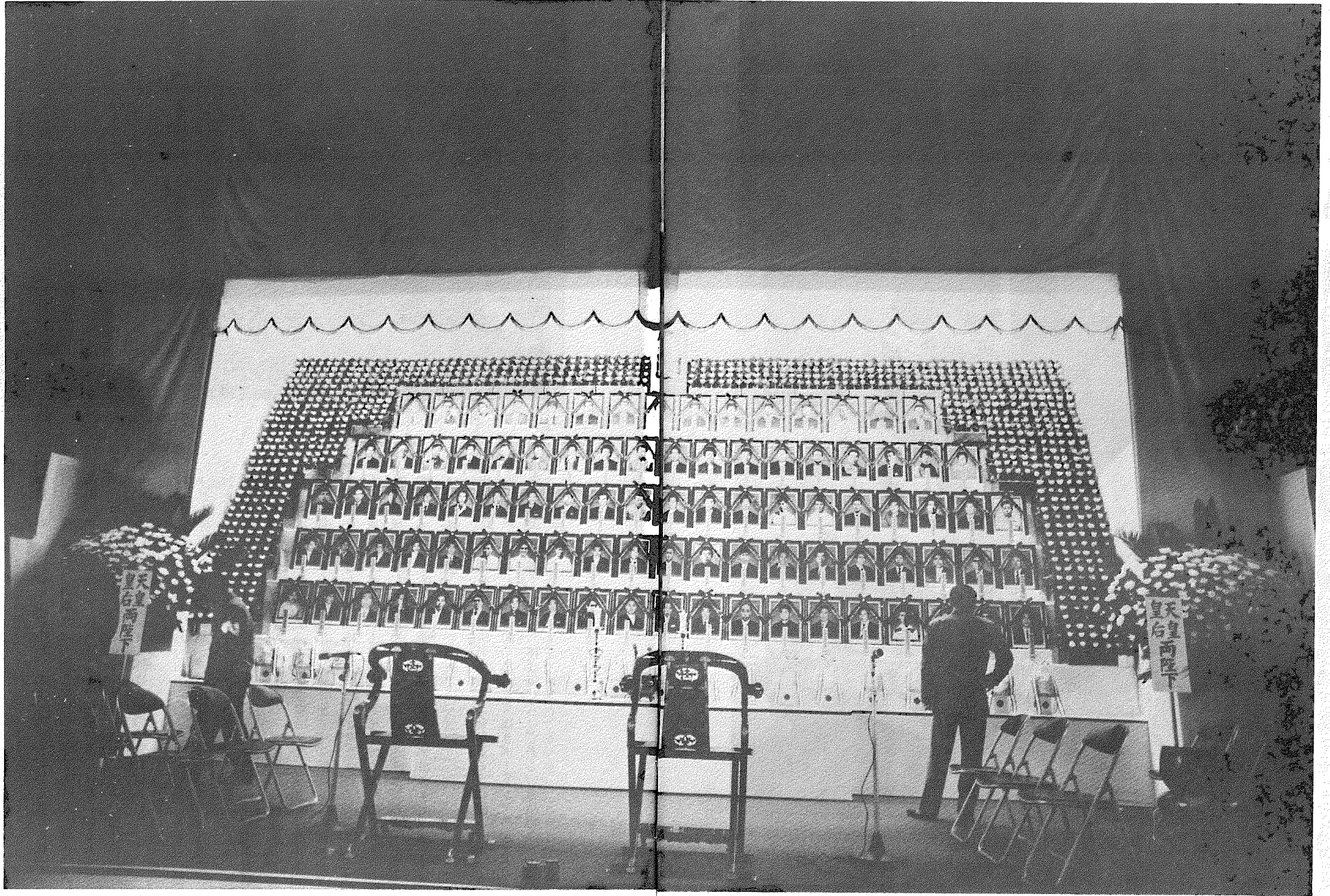
たかのようなシミ……。タンカの表面を洗い流した水が血を思わせるように床にしみこんでいた。

④ 風呂 春の訪れが近い昼下がり、炭住の共同風呂に向う老人たちがいた。世間話に興じたり、ふざけ合ったりしながら、老人たちは風呂に通じる坂道を下っていった。老人たちの多くはヤマ一筋に働き続けてきた定年退職者で、中には坑内で体をむしばまれたじん肺患者や一酸化炭素中毒患者もいた。

ここ高松地区は根わさびやアイヌネギ、竹のこなどの豊庫で、雪だけを待ちかねたようにスコップを肩に背負い、山菜取りにいそむのが楽しみのひとつでもある。が、老人たちのどかな表情に近ごろ、さびしさといらだちが漂うようになった。この一帯が露天掘りのために立ち退きを余儀なくされ、来春までには移転しなければならぬからだ。老人たちは毎日、露天掘りの現場に足を運んではため息まじりにつぶやいた。「何十年もスミを掘ってきたオレたちが今度はスミに追い出されるんだからな」。

⑤ 位牌 今年三月三十一日、十五体の遺体が家族のもとに帰った。事故以来、百六十六日間も坑内に遺棄されていた最後の十五人だった。全員が組夫で、この日、五遺体だけが火葬にふされた。雪のぬかみを短い葬列が火葬場にむかった。五軒長屋の炭住の空屋には祭壇がしつらえられていた。一輪さしの花と焼香台があるだけのその空屋で五人の仮葬儀が営まれた。この中の一人、森川寿人さん（当時四十九）は「エアアが弱くなった。気温上っているので……」。







⑧

い作業が少なくなったため、狭い木風呂で汗を流したあとふたたびアナにもぐる組夫も多かった。

⑨ 列車 夕張線は山合いをトコトコと走っている。その二両編成の列車に乗ると、軽く会釈する高校生がいた。

彼女の父親はこの二月、妻子を残したまま突然姿を消した。筑豊のヤマから姉夫婦を頼って夕張にやって来て組夫として働いていた。母親は酒のある限り、三日三晩を徹して飲む癖があった。グイグイとおおるような飲み方で一升ビンを四本も空にしたことがあるといった。親方に雇われる時に借りた前借金(就職支度金)は九十五万円。生活保護から月々数万円ずつこの返済にあて手元に残るのはわずか三万円ほどだった。この春、中学を卒業した長男は札幌にでて、昼は大工の見習い、夜は職業訓練学校に通っている。この高校三年生の彼女も六月には生活苦から中退してしまった。

七月下旬のある日、彼女の家をたずねると、すてにもぬけの空だった。ガランとした部屋はきれいに片づけられていたが、どうした訳か、流し場に炊飯器が残されていた。あけてみると、まぶしいほどの御飯が一杯つまっていた。その後、この一家は父親と一緒に和歌山で暮しているという風の便りが届いた。親方に聞くと、まだ前借金六十数万円残っているといった。

⑩ さくら 五月中旬の炭山祭のある日、桜の開花にあわせるように水仙やチューリップ、たんぽぽなどがいっせいに花を咲かせた。祭の露天で買ったというイヤリングをつけた少女が花のまわりをとび



⑪

エアーが来なければ終。洋、厚子……(判読不明) 沢山は書け(不明) (原文のまま) という遺書を坑内に残していた。

⑫ 葬儀 春の遅い今年四月十日、九十三人の合同葬が北炭の体育館で行われた。遺影の両側には天皇と皇后の供花があった。九十三人の遺影の中にはキャップ・ランプ姿や学生服のあどけない顔もあった。葬儀のあと供花は遺族らに二本ずつ手渡された。最後の遺体が収容された時と同じようにこの日も外は突然の吹雪に襲われた。

夕張・春

⑬ 陽だまり 「幸福の黄色いハンカチ」の舞台となった若来日吉地区の高台で庭にゴザを敷いて日なたぼっこしている老人に出会った。「指にトゲが刺さったみたいなんだ」といって真黒い手を差し出した。日景十一さん(六七)といい、十六歳の時からこの辺の小ヤマを転々と渡り歩いてきたということだった。「生れ故郷の福井県にもう一度、行ってみたいもんだなあ」といった。

一週間後にふたたび訪れた時、この老人は粗末な祭壇の上で黒ワクの中に入っていた。耳の遠い妻は「腹の中に虫がいて突然、死んでしまった」といった。

⑭ 出坑 坑内作業を終えた組夫はコーラをうまそうに飲み、タバコを吸いながら次々と詰所に向った。ガス抜きボーリングや掘進など危険な作業に従事するその肉体は傷だらけである。事故以来、請負



はねていた。少女が通う旭小学校はわずか五十数人で、来春には閉校するということだった。五年と六年はあわせて十二人で授業は複式。「ヤマがなくなったら、お祭あるのかな」と少女はいった。閉山後、この学校でも転校生たちが相次ぎ、九人だった野球チームも七人に減った。「内野を減らし、ライトとセンターを一人で守ればできるさ」と別の少年はいった。この学校は閉校後、市が進めている観光施設用の簡易宿泊所として利用されることになっている。

夕張・夏

⑩ パーティー 廃屋の一角にうまそうな臭いが漂っていた。孫請けに勤める小野哲男さん(四二)は三月末、腰痛による長期欠勤で首になった。生活保護で食いつなが毎日だが、この日は「子どもをどこにも連れて行ってやれないし」とジーンズスカンを奮発したのだった。たきものは近くの廃屋の板きれ、二十度の焼ちゅうがあつという間に空になった。

⑪ 七夕 「ローソク出せ、出せよ。出さなきゃ、かっちゃくぞ。おまけにひっかくぞ」。七夕の時、子どもたちはこう唄いながら夕暮れの炭住を一軒一軒、まわって歩いた。下請けの係員である高橋敏雄さん(三四)もほろ酔い気分で子どもたちと一緒に踊った。子どもをひざに抱く高橋さんのうしろの短冊には、「この幸わせがいつまでも続きますように」と書かれていた。あの事故の時、高橋さんは息を引き取った二人の仲間を同じひざの上のせ、冷たくなった体を



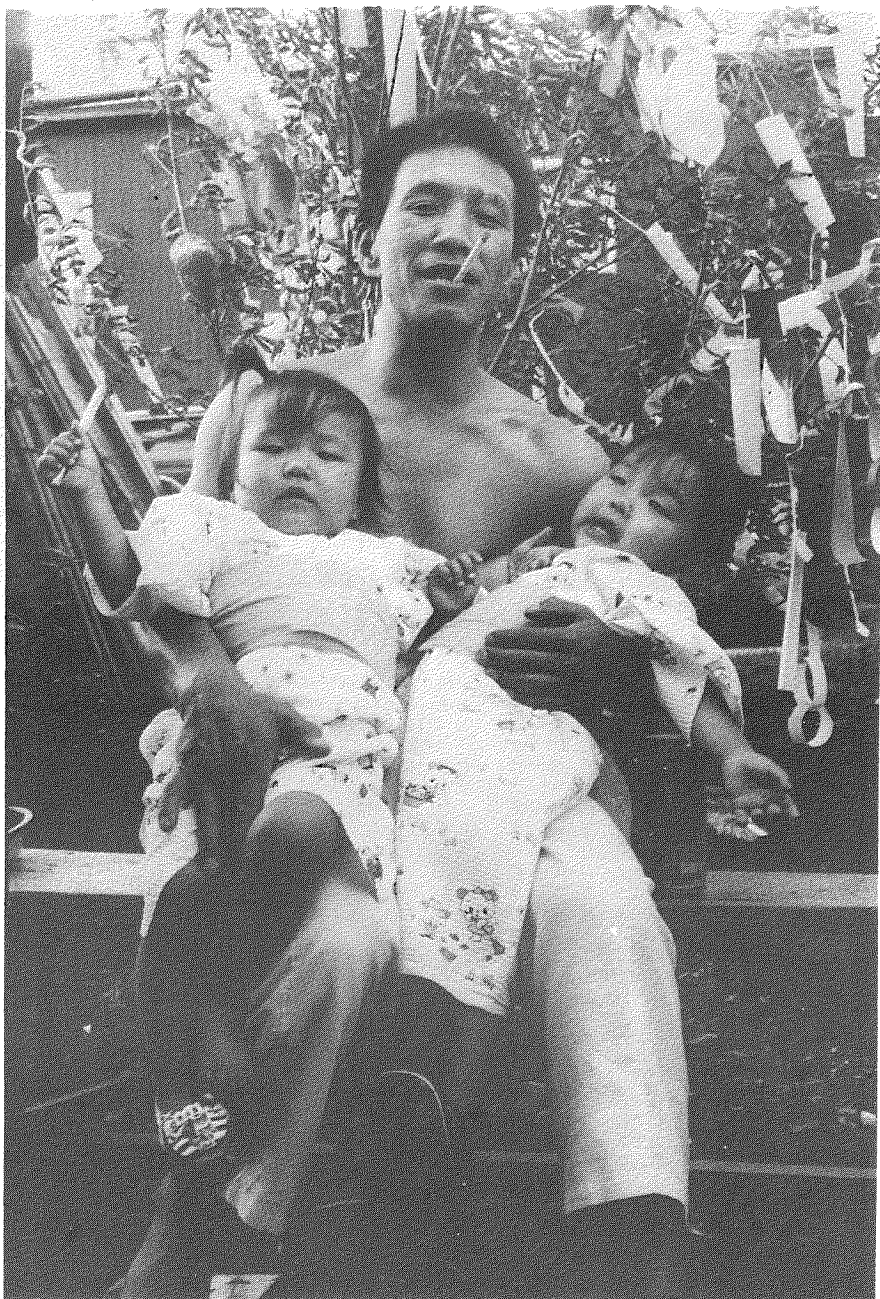
さすりながら「あなた変わりはないですか、日毎、寒さがつります……」と闇の坑内で歌い続けたのだった。

⑬お盆 ヤマの男たちが眠る未広共同墓地は丘全体が墓群である。「新夕張自礦夫遭難者哀悼碑」(明治四十一年、九十三人死亡)、「丁未自坑夫遭難者之墓」(大正三年、八人死亡)、「若鍋鉱災害哀悼碑」(大正三年、四百二十三人死亡)、「北上坑遭難者之碑」(大天九年、二百十二人死亡)のほか朝鮮人坑夫の「神霊之墓」や友子の墓もある。九十三人の犠牲者のうち半数以上がこれらの墓に囲まれるようにしてここに埋葬された。「今年のお盆は例年になく忙しい」と坊さんは汗をふきながら墓を走りまわっていた。

⑭廃屋 夕張は谷合いに伸びた街である。ヤマが隆盛をきわめた昭和三十年代、山のとっぺんまで炭住が建ち並んでいた。人口は十二万人をかぞえ、小中学校は三部制だった。今、そのほとんどは廃墟となり、背丈ほどもある雑草におおいつくされている。風呂場の丸窓がかつての栄華をしのばせるだけである。年寄りたちは「あの夜景を見せたかったなあ!。函館とどこいだぞ」と口をそろえた。

夕張・秋

⑮子犬 小学三年の由紀ちゃんの家で子犬が生まれた。五匹のうち二匹はもらわれていった。「お父さんが帰って来なくなつたので淋しい」と由紀ちゃんはいった。閉山に先立って解雇された組夫の父





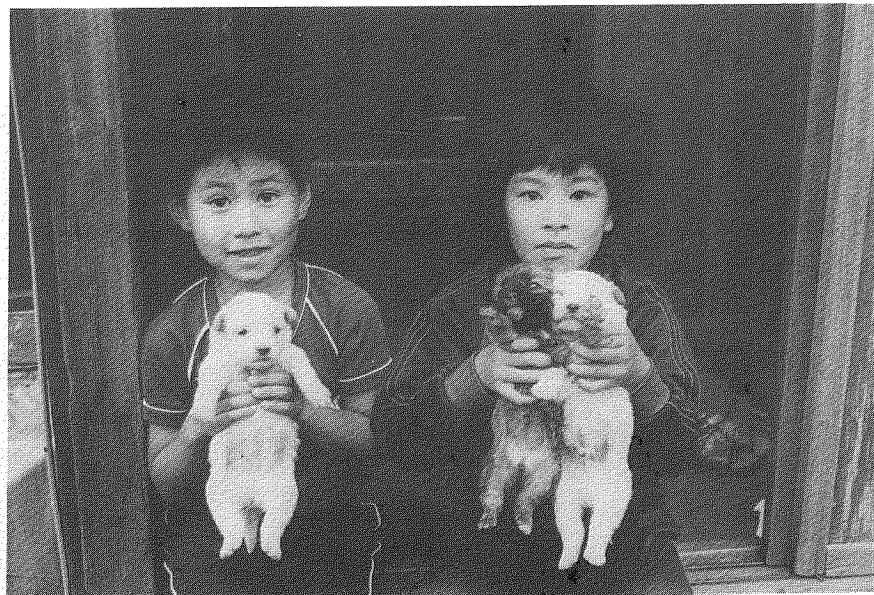
13

親は今年四月から札幌に出稼ぎに出た。土曜日と月曜日は帰ってくるという約束だった。学芸会のあった九月末の土曜日、父親は姿を見せなかった。母親は警察に「捜索願い」を出した。

⑩ 坑夫 「筑豊ぐれん隊」とあだ名をつけたら新ちゃんは「ケツケッ」と笑った。林新一さん(四十三)は筑豊で生まれた。三井山野鉱の閉山で夕張に流れてきた。途中、神戸で土方仕事をしていたという。この時、傷害事件を起こして、臭いメシを食ったというのだが、新ちゃんは詳しいことは語らず、ただ笑うだけだった。酒くさい息を吹きかけながら「アナから上ってきたら飲みにいこうや」と大声を張り上げながらゲージに消えていった。この日も出がけに酒八合を飲んできたといった。飲んべえの新ちゃんの特技は嚴重な入坑チェックをたくみにかいくぐることである。

⑪ 少女 コスモスの花が揺らぐ秋の日、澄江さん(四十八)は組合の情宣ビラを配って歩いていた。末っ子があとを追った。十人の子沢山だから夫の稼ぎだけではとても食っていけない。「うちは生活保護はもらっていないよ」という澄江さんは、朝は新聞配達をし、午後三時にはパチンコ屋に働きにでる。一日に腹におさまる米の量は二升以上。米代だけで月にざっと三万五千円にもなるという。直轄の夫が首になった後、澄江さんは大根二百本と白菜百個を大きな樽に漬けこんだ。十人の子どもたちがせつせと手伝っていた。

⑫ 組夫 小林正行さん(四十七)は「オレはもうなんもないぞ」と



15

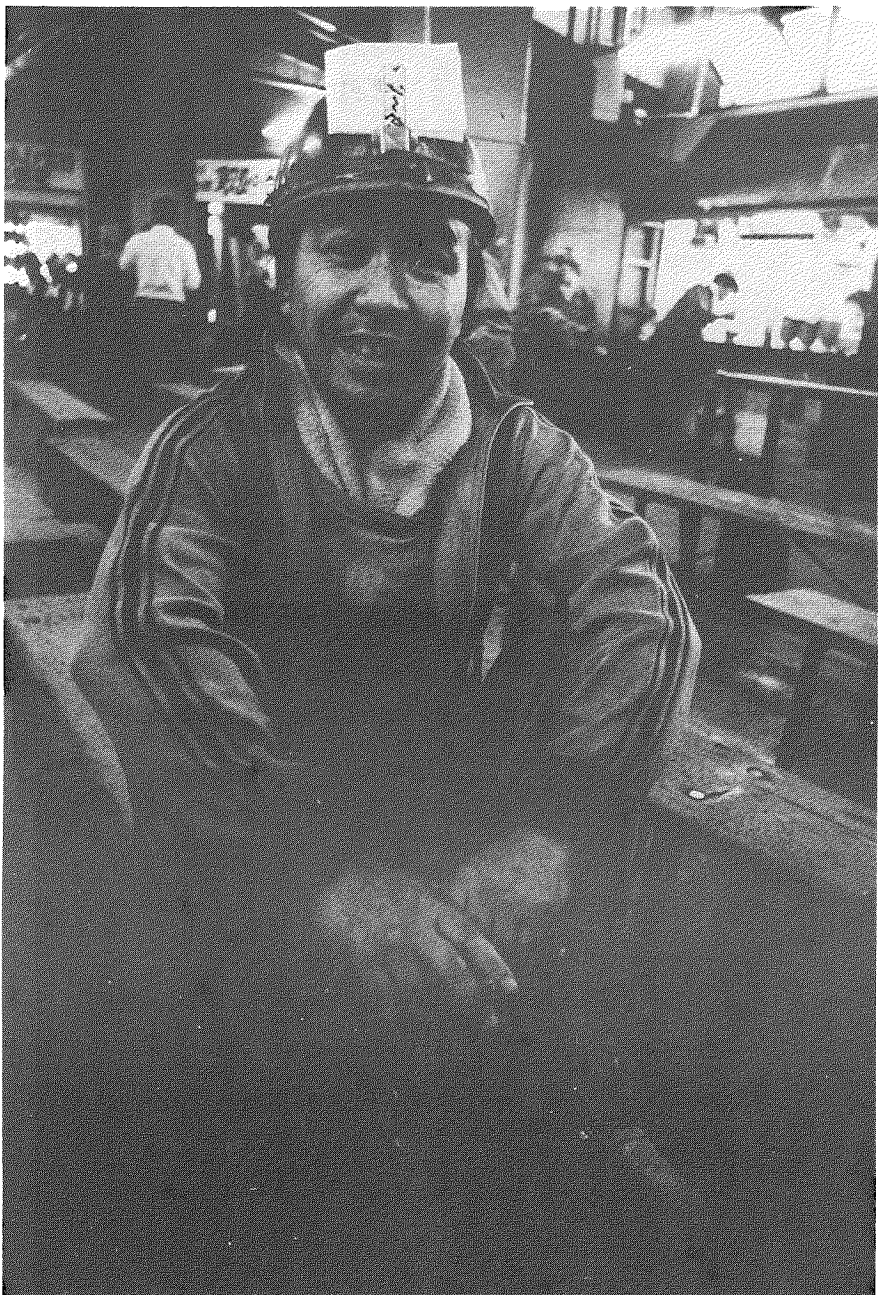
いって指の包帯をほどいてみせた。昨年七月、坑内で中指を切断した。前借金が八十三万円あったが、指の代償である労災一時金の九十万円で相殺した。娘の入院費用として親方から借りた金だった。昭和三十年、住友赤平鉱に入った。運動神経がすば抜けており、団体のジャンプ競技で六位に入賞したこともある。東京にあこがれていた小林さんは昭和三十四年に上京し、川崎重工で沖仲士の仕事をした。ロカビリー全盛時代で、ヤマの退職金を使い果すまでダンスや女に熱中した。だが、やっぱりヤマにもどってきた。小ヤマを転々とし、住友歌志内鉱に十年間働いたが、ガス爆発で閉山したため、北炭にきた。

肝臓を悪くして、稼ぎもよくなかった。閉山後、手にした雇用保険は月に八万円にしかない。四人家族を養うため、生活保護をもらった。「味噌おにぎりをストロブで焼いて食べれば腹いっぱいになる。十一人きょうだいの末っ子で貧乏にはなれているからな」と小林さんはいった。

⑩入坑 北炭夕張炭鉱は十月九日閉山し、十四日にはおよそ二千人の従業員が全員解雇された。最後の入坑となった九日午前零時、坑員たちの口から突然都はるみの演歌がとびだした。「さようなら、さようなら、元気でいてね……」。

閉山前、ヤマの男たちが愛唱していた独航船の替え歌があった。

へここは夕張、炭坑の町だ。おっぼりだされりや、おだぶつだ。おいでなすつたでかいガスが、未練心をぶつたぎる。トコドッコイ、命知らずの炭坑夫……。



16





みんなの間で「夕張炭坑節」と呼ばれていた。

④ 刺青 北海道で最大の暴力団「丁字家峰谷三代目中山分家山森一家」の舎弟分と肩をいからせていた清野美津雄さん(三十四)の腕の刺青も最近心なしか色あせてみえる。

北炭夕張新鉱の開山によって解雇され、いま彼は「国家公務員」。さぞかしヒマをもてあましていると思ったら、以前にもまして多忙な毎日をおくっている。オカに上ったとたん、漁師のはしくれを自認し、いつの間にか秋アジ(サケ)の密漁団の頭領にのしあがっていた。早朝、近隣の川にのぼってくる秋アジを一本釣りして、手下を使つては炭住街や食堂などに売りさばく。筋子がびっしりつまつたメス一匹二千五百円、オス千円という超特価品。あつという間に売りきれしてしまう。

直轄鉱員と違つて退職金もない組夫たちの生活は貧苦のどん底だが、その表情は妙に明るく、あつげらんとしてゐる。十月二十九日、魔鉱に放置されている鉄材を横流ししていたグループが警察に摘発された。「最近は一昨日は三万にもなるよ」といつていたある組夫は「俺たちは棄てられた鉄くずと同じようなものよ」とニヤリと笑つた。

夕張・初冬

⑤ 不治 十一月十四日、ある公害患者が多量の睡眠薬を口にあげた。あの事故で「酸素欠乏症」と診断され、今でも頭痛や不眠、吐気、物忘れなどの後遺症に悩まされ続けているこの人は「病院には





知らせるな」という遺書を残していた。命だけは取り止めた。数人はいると思われる酸欠患者は再就職のメドもたないまま解雇された。閉山直後、ロッカー室に置いてあった工具や洗面道具・下着類などを背負って、みんなヤマを下りていった。

子どもの手を引いた母親の姿があった。この人の夫も酸欠患者で「うちのお父さんはほとんど寝たきりなんです。だから代わりに……」といった。子どもは父親の使っていたヘルメットをかぶり、閑散とした線込所を無邪気に走りまわっていた。「お前の父ちゃんはパーになったんだってなとからかわれ、学校から泣いて帰ってきたこともあるんです。医者には仮病ともいわれるし」と母親は涙ぐんでいた。霜枯れの炭住街でこの子供にカメラをむけると、「そんなの撮るな、新鉱の恥になる」という女の声が背後から聞こえてきた。

②仙人 山のてっぺんに仙人が住んでいるときいてたずねていった。部屋に足をふみいれて驚いた。古時計十個、床屋で使っていた大鏡とイス、時代ものの扇風機、銅製のヤカン、くすんだ油絵……。骨とう品に囲まれながら、仙人は悠然と煙草をふかしていた。

俊正のじいちゃん（六十七）はかつて北炭で水道配管などの仕事をし、いまは厚生年金で暮している。月十一万の年金から家賃や光熱費など八千円がひかれるが、自給自足の仙人暮らしには、余裕がある。他人の土地まで耕した二反の畑では何でもとれる。「雪も近いし、そろそろ焚きものの準備でもするか」といって、じいちゃんは隣の廃屋を解体した。「この家では数年前に五人家族が一家心中したんだよ」とじいちゃんはいい、首吊りの格好をしてみせた。

ここは、あの「幸福の黄色いハンカチ」の舞台となった長屋である。

③別れ 「さて、金もどんどん入ってくるし、若い男でも連れ込んで遊んでやるか」と妻がいたずらっぽく笑った。優良鉱員の表彰状がいっぱい飾ってある部屋で板垣美さん（五十二）は妻と一緒にカボチャとトマトの漬物でお茶をすすり、「じゃ、行って来るよ。表札の変わっていないことを願ってな」といった。板垣さんは北炭内鉱への再就職が決って、この日、単身赴任した。一ヶ月二回、送迎バスが運転されることになっているが、「オレもむこうで新しく所帯を構えるかも知れんぞ」とペロリと舌を出した。北炭系三山など他山への再就職者の引越しも十一月中旬であらかた終わった。

④まぼろし 「だあれもいなくなったアナの中のネズミどもがかわいそうだな」と閉山後も保坑要員として働いている齋藤長一郎さん（四十九）がいった。閉山前、ネズミたちはヤマ男たちの弁当を食い荒らし丸々と太っていたが、ヤマが死んだいまは弁当どころか、坑材すらない。「背中の工具袋の上をネズミが走りまわるんだよ。早く新会社ができれば一番喜ぶのはこのネズミどもではないかな」と齋藤さん。いま、清陵の炭住街では、早朝マラソンに精をだす男たちの姿がみられる。「来年の新会社にむけて、体をきたえておかないかな」と照れながら男たちは口をそろえる。しかし、その新会社そのものは、藪の中だ。空屋がめだつ炭住街に最近えさを求める野犬がやけに多くなった。







編集後記

この号は戸田れい子さんの写真と文章だけで編集した。楽団だよりは休載。来年からはこういうかたちのものをふやしてみたい。戸田さんは若いカメラマン——ではなくウーマンか。ともかく写真家。大きくて「美人」しかも、たいへんつまやうな人だ。最近是一年のほとんども夕張で過ごしているらしい。一枚一枚の写真のうちに、そこにうつされた人びとと彼女が共有してきた長い時間を感じることが出来る。

「おそくなつて申し訳なく思っております。夕張もついに雪景色、黒い男物の二五・五センチの長靴をはき、歩いていきます。二十一日からは、函館の羅白に写真撮りにてかける予定です。北海道の長い冬に再度挑戦したいと思います。思っています。まだ東京へは戻らないつもりです。それでは、みなさん、風邪などひかぬように、お元気で」

写真といっしょにとどいた彼女の手紙。カメラ片手にいまでも雪のなかをグイグイ歩きつづけているのである。「文章は(朝日新聞の)増子義久記者に手伝ってもらいました」とのこと。ありがとうございます。

凱風

隔月(偶数月)発行

個をみつめ、個の歴史をつづる

現代中国を軸に、同時代の民衆史を記録する。

▲第三号目次より——発売中
 ■わが子は異郷にあり(一)「傅雷家書」(傅雷著)より 訳白井啓介
 ■最後の陶工/金城次郎と沖繩の工芸 筑紫哲也/文 大塚清吾/写真
 ■ブックランド/「唐代の科挙と文学」(程千帆著) 町田隆吉
 ▲創刊号目次より
 ■中国への距離(一) 松岡栄志
 ■蕭珊を想う(上)「随想録」(巴金著)より 訳・刈間文俊
 ▲第二号目次より
 ■残された中国人養父母たち/中国残留日本人孤児問題への視点 清水勝彦
 ■蕭珊を想う(下)「随想録」(巴金著)より 訳・刈間文俊
 ◇お申し込みは左記あるいは、お近くの書店へ。
 ◇年間購読料(六回) 一八〇〇円(送料共)
 ◇一冊定価 二〇〇円
 〒一〇四東京都中央区銀座一—
 二〇—二 松村ビル四階
 株式会社 凱風社
 電話〇三—五六七—五〇三〇

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお知らせください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第四巻第十二号

一九八二年十二月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ